

宮本古墳

1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

宮本古墳

1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、昭和62（1987）年度に総領町から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した団体営農道整備事業（万田地区）に係る宮本古墳（広島県甲奴郡総領町大字五箇字宮本1207番地）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員銀治益生・岩本芳幸が実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は銀治・岩本が行い、遺物の整理・実測・写真撮影および図面の製図は岩本が中心となって行った。また、本書の執筆・編集は岩本が行った。
4. 本書に使用した遺構の略記号は次のとおりである。
SK：土壙， SX：集石遺構
5. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（庄原・上下）を使用した。
6. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
7. 採図と図版の遺物番号は同一である。
8. 本書に掲載した遺物実測図の断面は、須恵器・陶器は黒ヌリ、弥生土器・土師器は白ヌキ、磁器はアミ目で示した。



目 次

I はじめに.....	(1)
II 位置と環境.....	(2)
III 調査の概要.....	(6)
(1) 調査前の状況	
(2) 調査の経過	
(3) 古墳	
(4) SK1	
(5) SX1	
(6) その他の遺構と遺物	
IV まとめ.....	(15)

図版目次

図版1—a 遠景（南から）	
b 調査前近景（南から）	
c 墓丘断面（南から）	
図版2—a 天井石	
b 石室検出状況（南から）	
c 奥壁（南から）	
図版3—a 東壁（西から）	
b 西壁（東から）	
c 基底石及び掘り方（南から）	
図版4—a SK1（東から）	
b SX1上部遺物出土状況（北から）	
c SX1上部集石検出状況（北から）	
図版5 古墳・SK1出土遺物	
図版6 SX1・上部遺構外出土遺物	

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図（1：50,000）.....	(3)
第2図 総額町内出土遺物実測図（1：3）.....	(4)
第3図 宮本古墳周辺地形図（1：1,000）.....	(5)
第4図 遺構配置図（1：100）.....	(7)
第5図 墓丘土層断面図（1：100）.....	(8)
第6図 石室実測図（1：60）.....	折込み
第7図 古墳出土遺物実測図Ⅰ（1：3）.....	(10)
第8図 古墳出土遺物実測図Ⅱ（1：2）.....	(10)
第9図 SK1実測図（1：30）.....	(11)
第10図 SK1出土遺物実測図（1：3）.....	(11)
第11図 SX1実測図（1：40）.....	(12)
第12図 SX1上部出土遺物実測図（1：3）.....	(13)
第13図 SX1上部出土鉄滓.....	(13)
第14図 遺構外出土遺物実測図（1：3）.....	(14)

I はじめに

宮本古墳の発掘調査は、総領町が実施した団体営農道整備事業（万田地区）に係るものである。甲奴郡総領町大字五箇は、江の川水系田總川に沿って耕地が開けているが、五箇を南北に貫く県道中領家庄原線は幅員が2.5mしかなく、また、宮本地区と田野河内地区とを結ぶ万田農道も幅員が2~2.5mで、大型車の通行が困難であるため、万田農道を改良し、さらに田野河内地区と北部の松山地区とを結ぶ農道建設が計画された。この計画に基づき、昭和61（1986）年、万田地区（宮本~万我~田野河内）で工事が開始された。ところが、9月に宮本地区で工事中に横穴式石室が発見され、同月総領町教育委員会から文化庁長官あて遺跡発見の通知が出された。遺跡発見後、広島県教育委員会と総領町が遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、計画路線の近くに河川があり、地形も急峻なため、路線の変更が不可能で、現状保存はできないという結論に達し、事前に発掘調査を実施することとなつた。同年12月、総領町は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターに発掘調査を依頼し、昭和62（1987）年8月、委託契約を締結した。調査は、同年8月17日~9月18日までの約1か月間実施した。また、9月12日に現地で見学会を開催する予定であったが、雨天のため中止になり、改めて11月14日、総領町民会館において総領町教育委員会と共に発掘調査報告会を開催した。

本報告書は、以上の経過をふまえて行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の研究や地域の歴史研究に寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたつては広島県教育委員会の指導を得るとともに、総領町建設課、総領町教育委員会及び地元の方々から多大の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

II. 位置と環境

宮本古墳は、甲奴郡總領町大字五箇字宮本1207番地に所在する。總領町は、広島県の東部中央に位置し、東は神石郡神石町、南は甲奴郡甲奴町・上下町、西は双三郡吉舎町・三良坂町、北は庄原市・比婆郡東城町に接している。吉備高原の西端にあたり、標高500m前後の高原面を田緑川などの河川が浸蝕してきた川沿いのわずかな平坦地が耕地として利用され、人家が点在している。全体的に地形は急峻で、町域の約85%が山林である。宮本古墳は、田緑川とその支流万田川が合流する地点から約60m北東に位置している。背後には600m級の山から派生した標高380mと低いながらも急峻な山が迫り、前面には合流点付近を中心とする狭い平坦地がある。古墳と万田川との距離は約20mで、対岸はやはり急傾斜の山である。古墳は、急斜面が緩やかになる傾斜変換点に位置している。その標高は、約320mである。

總領町で確認されている遺跡数は少なく、その大部分は中世の山城跡である。以下、町内の主な遺跡について時代毎に概観して行きたい。

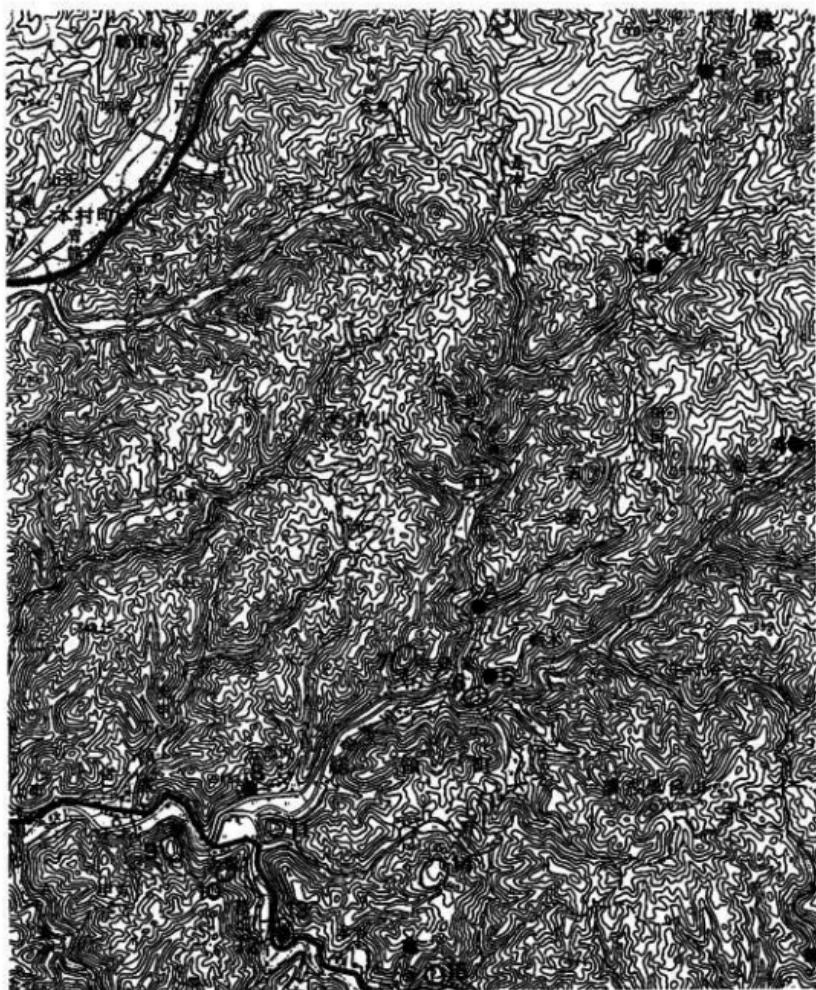
旧石器時代 町内では、今までこの時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代 下領家の總領小学校の敷地から縄文時代早期の押型文土器が出土している。また、黒目の岩谷堂（岩屋堂）遺跡で縄文時代後・晚期の土器が出土し、黒曜石・石英の剥片が採集されている。この遺跡は、帝釈峠遺跡群の最西端にあたると考えられ、付近には石灰岩洞窟も見られる。

弥生時代 黒目から出土したと伝えられる磨製石斧がある。この他、亀谷から中期・後期の土器片が出土している。

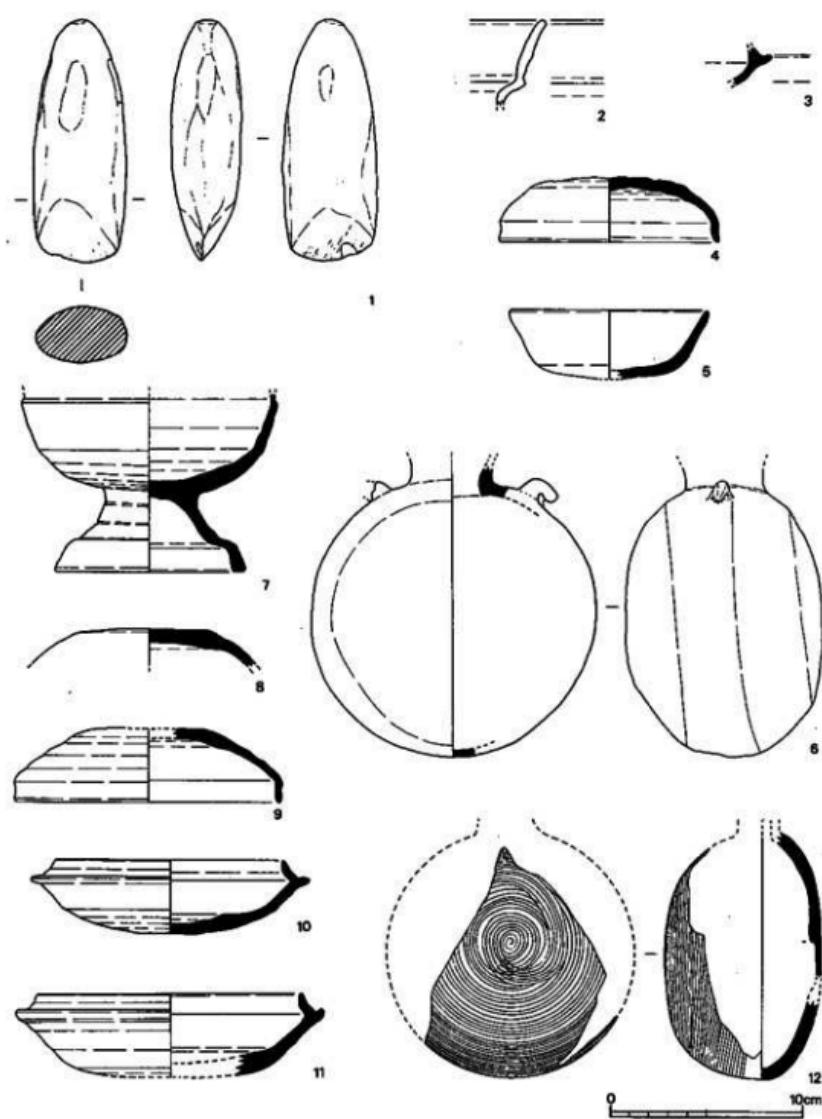
古墳時代 總領町では、近隣市町村に比べ、今までに確認されている古墳の総数は少なく、10基程度である。円墳で小規模な横穴式石室あるいは箱形石棺を内部主体とするものが多く、前半期の古墳は確認されていない。町内では、2つの古墳群が確認されているが、いずれも2基の古墳からなる小規模なものである。

稻草の舟追第1号古墳の横穴式石室から須恵器提瓶が出土している。また、五箇の風呂ヶ迫古墳は、箱形石棺を内部主体とし、須恵器高杯・杯蓋・杯身・提瓶が出土している。この古墳からは、鉄刀2、金環1が出土したと伝えられる。この他、亀谷の段畠第2号古墳と五郎丸古墳から須恵器が出土している。古墳以外では、亀谷で土師器壺または甕の口縁部片と須恵器杯蓋・杯身が出土している。



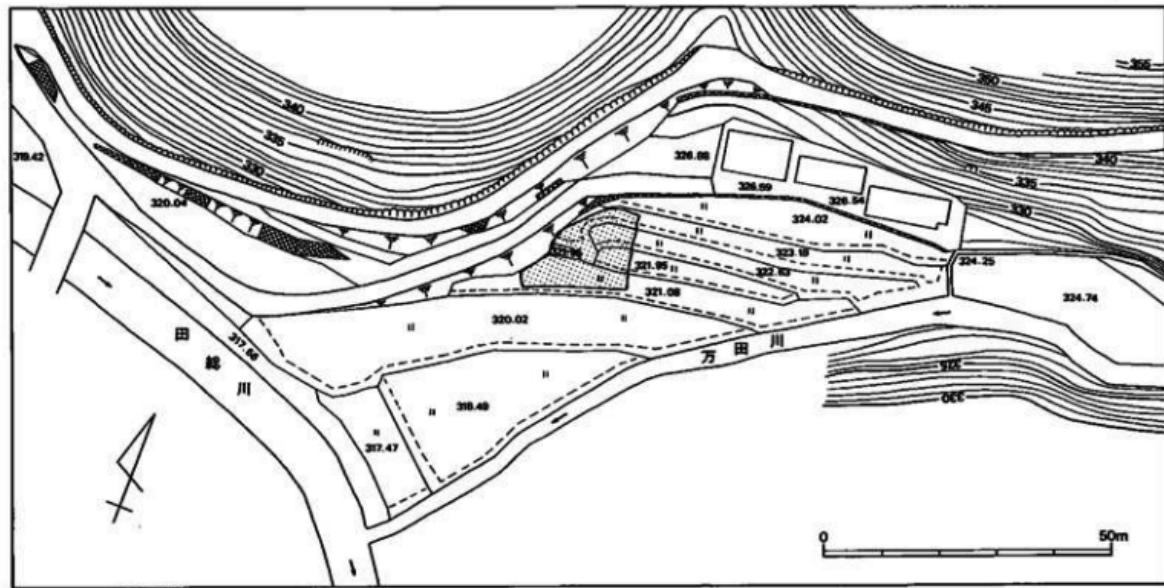
第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

- | | | | |
|-----------|----------|--------------|--------------|
| A. 宮本古墳 | 1. 鈴原たら跡 | 2. 松山古墳 | 3. 風呂ヶ迫古墳 |
| 4. 上領家遺跡 | 5. 稲本古墳 | 6. 柄木城跡 | 7. 明現山城跡 |
| 8. 五郎丸古墳 | 9. 井原城跡 | 10. 大谷山(竹)城跡 | 11. 茅(愛宕山)城跡 |
| 12. 段畠古墳群 | 13. 段畠遺跡 | 14. 龍王山城跡 | 15. 王子ヶ段城跡 |



第2図 総領町内出土遺物実測図 (1 : 3)

(1は伝黒目出土, 2~5は亀谷出土, 6は舟追古墳出土, 7~12は風呂ヶ迫古墳出土)



第3図 宮本古墳周辺地形図（1：1,000）（アミ目は調査区）

III 調査の概要

(1) 調査前の状況

本古墳の周辺は、早くから水田になっていたが、石室の天井石が地上に露出していたため、この部分は水田として利用できなかったようである。古くからこの地に巨石があることは知られていたが、古墳とは認識されず、昭和61（1986）年、農道建設工事によって、この石が撤去された。その結果、この石の下の両側に石が並んでいることが確認されたが、重機で内部が掘られ、床面から土器が出土したことから、初めて横穴式石室と認識された。その段階で工事は中断され、協議の結果、昭和62年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することになった。

(2) 調査の経過

古墳築造の基盤面である黒褐色粘質土まで掘り下げたところ、石室の西側で土壙（SK1）を検出し、調査区東端で、遺物が集中して出土する地点を確認し、下から集石を検出した（SX1）。

(3) 古墳

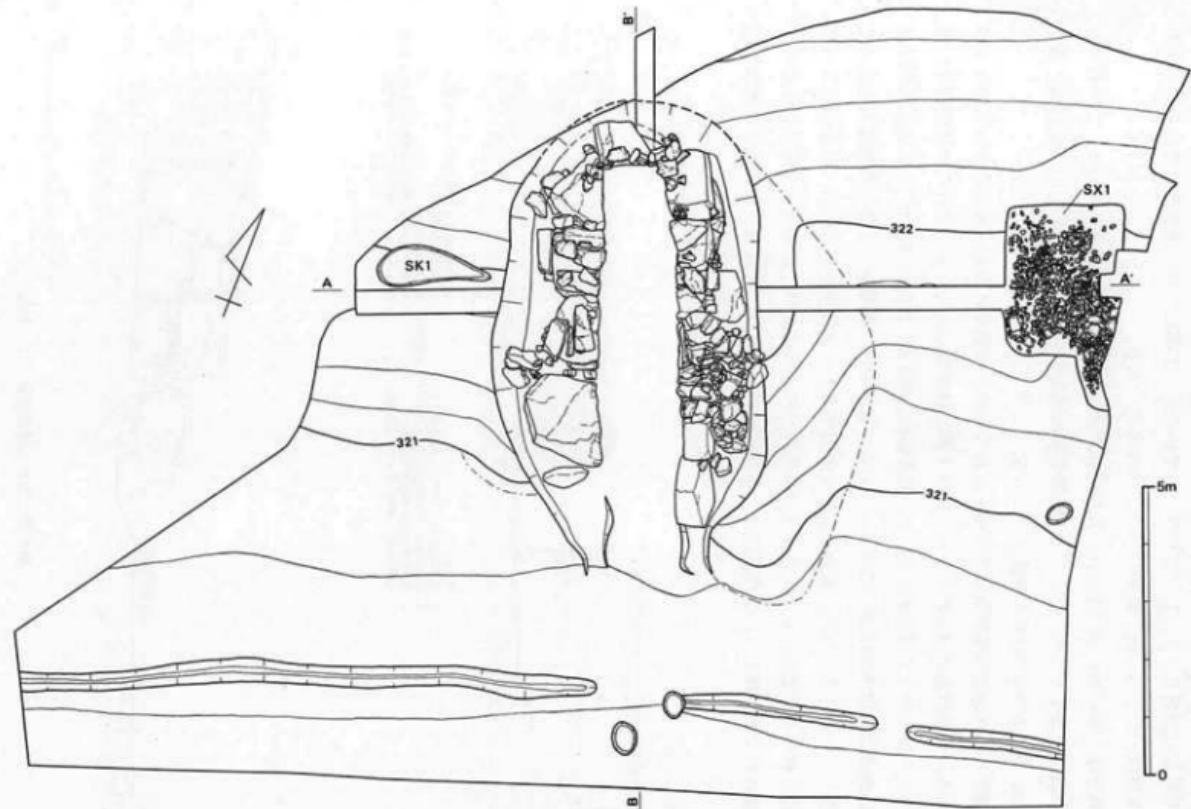
墳丘

開墾などにより、墳丘の大部分は削平、あるいは流失しており、盛土も石室周辺にわずかに残存しているにすぎない。盛土の残存状態は東側が良好で、側壁付近で約50cmの厚さで盛土が残っていた。これらの盛土は、石室掘り方が掘られた時の堆土が使用されたと考えられ、古墳基盤土（黒褐色粘質土）とほぼ同じ土である。盛土の東西両端間の距離は、6.4mを測るが、本来は直径10数mの円墳であったと推定される。ただ、地形の関係から、形の整った円墳でない可能性もある。

周溝は、前面及び側面では検出されなかった。石室の後側を調査することはできなかつたが、背後斜面をカットして馬蹄形の周溝を設けていた可能性が強い。また、この古墳の東側には谷があり、この谷が区画の役割を果していたことが充分考えられる。

内部主体

本古墳は、無袖の横穴式石室である。主軸方向はN21°Eで、南に開口している。石室の現存長は、東壁で約6.3m、西壁で約5.4m、幅は奥壁部で約1.3m、奥壁から3mの位置で約1.5m、入口側で約1.6mであり、若干入口側が開いている。高さは、工事によって本来の床面より深く掘削されているが、約1.5mと推定される。今回の調査では、両側壁の前面で側壁基底石の抜き取り痕を検出し、本来の石室の長さが約7.2mであることが判明した。

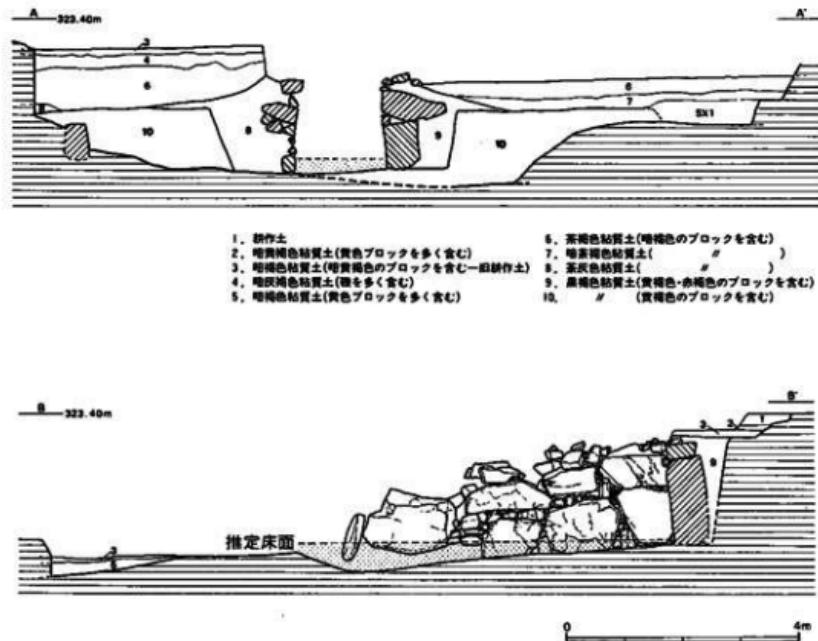


第4図 遺構配置図 (1 : 100)

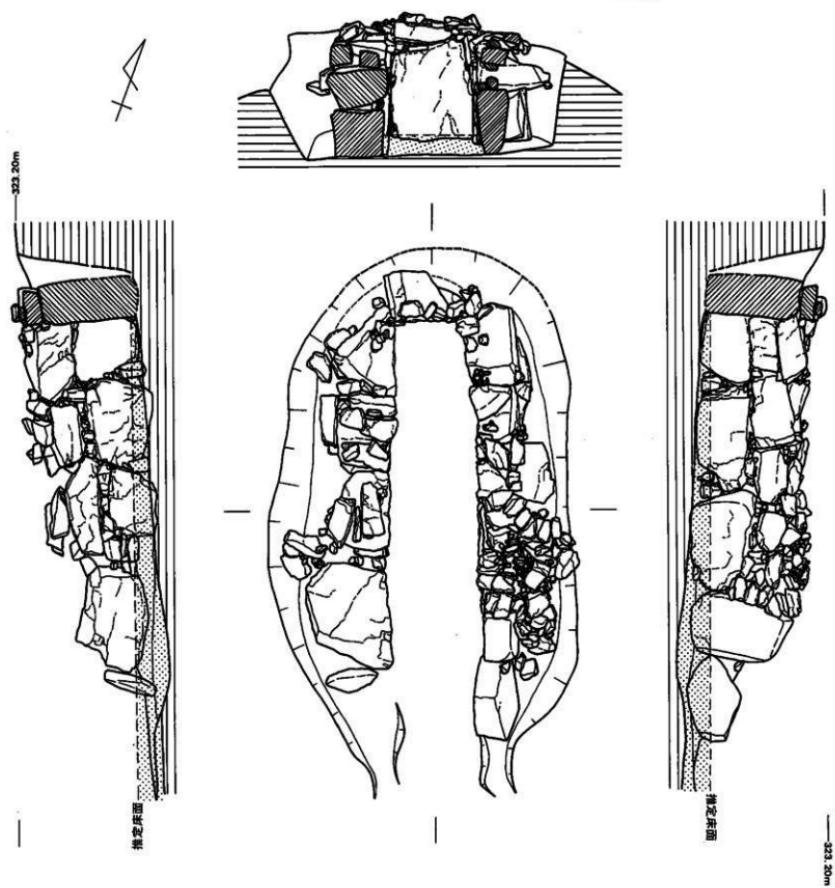
天井石（図版2-a）は、2枚残存していたが、工事により、撤去されている。その中の1枚は、 $2.2 \times 1.7\text{m}$ 、厚さ0.7mと大きなものである。

奥壁は、幅1.3m、高さ1.5m、厚さ0.6mの大きな石材を広口積みしている。この石は左右の高さが異なるため、低い方に小角礫を置いて高さを調節して、その上に幅1.0m、高さ0.2m、厚さ0.5mの石を小口積みしている。

側壁のうち西壁の基底石は6枚用いられていたと推定されるが、現存しているのは4枚である。東壁の基底石6枚のうち入口の1枚は抜き取られている。これらの基底石は、奥壁から入口に向って順に積んでいる。基底石は、幅0.8~1.6m、高さ0.7~1.0m、厚さ0.6~1.2m程度の比較的大きい石を用いている。東壁では、奥壁から4番目の基底石を立てて使用している。この石は、羨道と玄室を区別するという役目をもつほか、石室の高さの基準にされたと考えられる。この4番目の基底石の上端の高さに合わせて2段目以上の石が積まれたことが窺える。2段目には、中規模の石が使われ、1段目の石の高さが異なる場



第5図 墳丘土層断面図 (1:100)



第6図 石室実測図 (1:60)

合は、1段目と2段目の石の間に小礫を詰めている。2段目で基準の高さに達しない場合、その上に小さい石を積んで高さを調整している。なお、東壁では奥壁から3番目の基底石上に積む石として使用するのに適当な大きさの石が無かったようで、比較的小さな角礫を積み重ねている。

西壁の残存状態は、東壁に比べて悪く、工事によって撤去された石もある。西壁の石の積み方も東壁とはほぼ同様で、東壁の高さに合わせるため、基底石と2段目の石の間に小さい石を詰めるなどの工夫をこらしている。

西壁のうち奥壁から1番目の基底石と、2番目の2段目の石は表面が平滑な花崗岩である。石室に使用された石材を見た時、さまざまな種類の石が使用されているが、特に花崗岩が多い。また、角の丸いもの、鋸いものがあり、これらの石材は一箇所から運び出されたものではなく、数箇所から寄せ集められたものと考えられる。

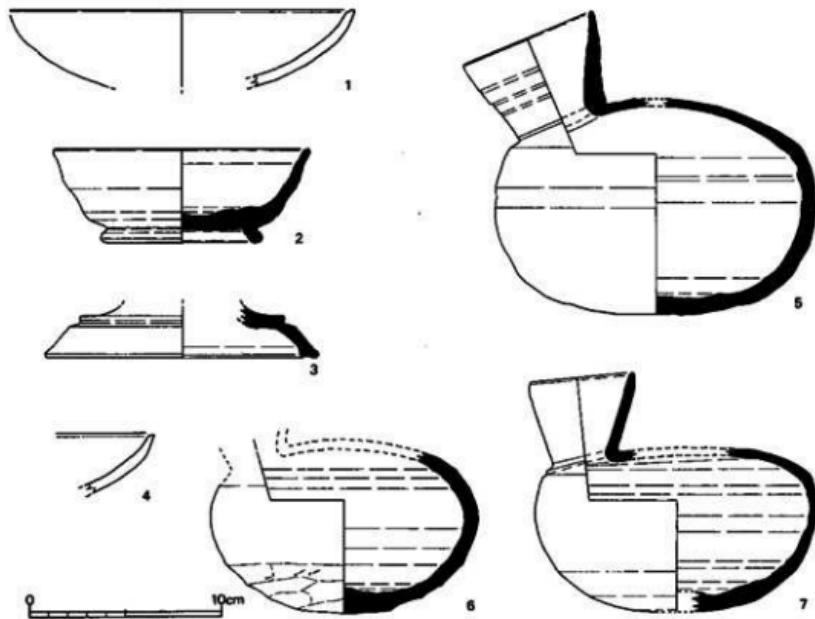
石室掘り方

石室掘り方は、長円形を呈している。長軸約8.5m、短軸約4.5mを測り、深さは石室奥壁部で約2.0mで、基盤面の傾斜に沿って順次浅くなる。石室と掘り方との間には、0.4~0.8mの間隔があり、裏込石は殆どみられない。掘り方は、基盤面の黒褐色粘質土を掘り込んでおり、基盤土と掘り方内の土の違いは、赤褐色のブロックを含むか否かで、殆ど違いはない。掘り方は、地山面まで達していない。今回の調査では、基底石をはずすことはできなかつたが、基底石を安定させるために、基底石を置く部分は一般深く掘り込んでいた可能性が強い。

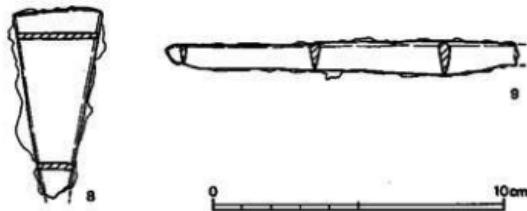
出土遺物（第7・8図、図版5）

1~3は、工事中奥壁付近の石室床面から出土した土器であり、4~9ならびに須恵器杯蓋・甕や土師器の破片が墳丘盛土から出土している。

1は土師器高杯の杯部片である。赤褐色で、復元口径は17.7cmである。杯部は大きく開き、口縁は内湾している。口径の割に杯部は浅く、全体にヨコナデを施している。2は須恵器杯身で、内面は灰色、外面は淡茶灰色で、復元口径13.0cm、高台径7.6cm、器高4.9cmである。底部は、回転ヘラ切り後、高台を貼り付け、軽くナデしている。その他の部分は回転ナデである。3は須恵器脚部片であるが、器形は高杯になるか、台付壺になるか不明である。復元底径13.9cm、灰褐色で、焼成は不良である。全体に回転ナデを施すが、外面はヘラケズリにより段を作り出している。4は土師器高杯の杯部片と思われ、1と同じような器形になると考えられる。淡赤褐色で、全体にヨコナデを施す。5~7は須恵器平瓶である。5は灰色で、復元口径7.2cm、器高15.75cmで、胴部最大径は中位にあり、16.6cmで



第7図 古墳出土遺物実測図I (1 : 3)



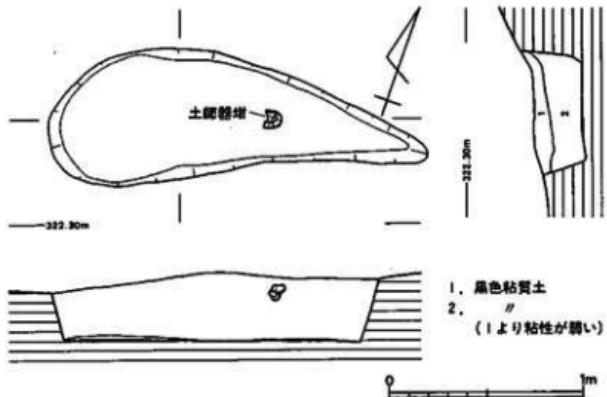
第8図 古墳出土遺物実測図II (1 : 2)

ある。口縁部に3条の凹線がめぐり、底部はやや丸底をなしている。6の内面は淡紫灰色、外面は灰色で、口頸部は欠損している。胴部最大径は中位にあり、13.8cmである。底部は丸底をなしている。7は灰色で、口縁内面には緑色、頸部から肩部にかけて緑褐色の自然釉がかかる。復元口径5.25cm、器高12.3cmで、胴部最大径は中位よりやや上にあり、14.6cmである。底部は丸底をなしている。5～7とも胴部下半はヘラケズリを行った後、部分的にナデを施す。その他は回転ナデあるいはナデを施す。

8は方頭広根斧箭式の鉄鎌で、基部は欠損している。現存長6.4cm、鋒幅3.1cmで身部の断面は長方形である。9は鉄製の刀子で、基部は欠損している。現存長12.1cm、身部の幅1.15cm、厚さ0.4cmである。

(4) SK 1

調査区西側、石室
掘り方に近接する不
整長円形の土壙であ
る。規模は、長軸1.97
m、短軸0.67m、深さ
0.25~0.35mで、西
側が広く、東側が狭
くなっている。上部
で土師器塙が出土し
た。

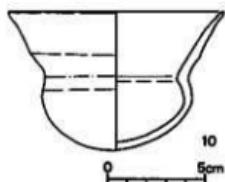


第8図 SK 1実測図 (1:30)

出土遺物(第10図、

図版5)

出土遺物は、土師器塙のみである。復元口径11.0cm、
頸部径7.4cm、胴部最大径7.8cm、器高7.15cmで、色調は
淡赤褐色である。頸部はゆるやかに「く」字状に屈折し、
口縁部は斜め上方にのび、端部を丸くおさめている。大
きく開いている口縁部に比べて胴部は小さい。全体的に
磨滅が著しく、調整は不明である。



第10図 SK 1出土遺物
実測図 (1:3)

(5) SX 1

調査区の東端で検出した集石で、調査区の他の部分には殆ど石がまとまって認められないことから集石遺構と考えられる。南北2.4mの幅の範囲に拳大から人頭大にかけての角礫
が敷き詰められた状態で検出され、特に南側の部分には人頭大の礫が多かった。

なお、この集石は、さらに調査区外の東側にも続いているものと思われる。また、この
集石遺構の約15cm上からは土器（須恵器・土師器）・鐵滓・炭化物が出土したが、これらが
集石遺構に伴うものか否かについては明らかにできなかった。また、この所属時期につい

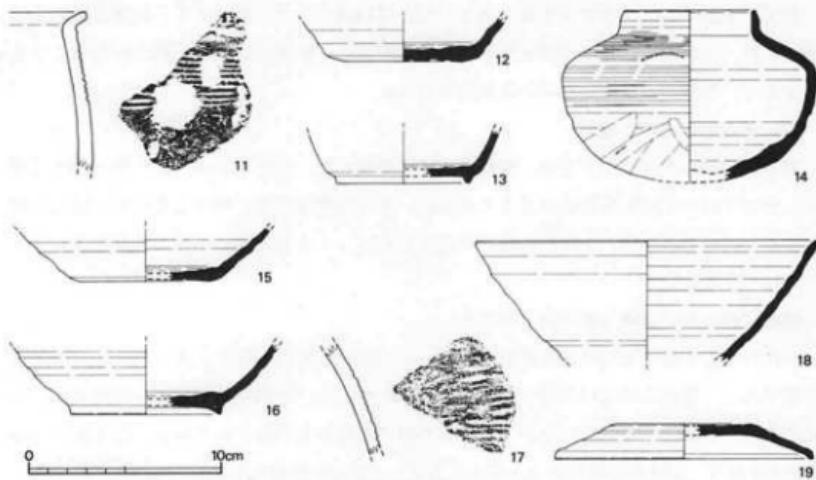


第11図 SX 1実測図 (1 : 40)

ては不明である。

出土遺物 (第12図、図版 6)

弥生時代から平安時代までの土器が出土した。11は弥生土器の甕である。胸部の張りは少なく、口縁部は「く」字状に短く外反する。口縁端部に刻目を、肩部外面に9条のヘラ描き沈線を施す。外面口縁部と内面は横ナデである。12は須恵器杯身で、淡灰褐色で、復元底径は7.8cmである。底部は平底で、回転ヘラ切り後軽いナデを行っている。体部は内外面とも回転ナデである。13は須恵器杯身で、内面は暗青灰色、外面は暗灰色で、復元高台径は6.9cmである。底部は回転ヘラ切り後、高台を貼り付け、高台内をナデしている。体部は内外面とも回転ナデを施す。14は須恵器短頸壺で、内面は暗灰色、外面は灰色、復元口径



第12図 SX 1上部出土遺物実測図（1：3）

6.7cm、胴部最大径13.2cm、器高推定8.95cmである。口縁は内傾して立上り、肩部から胴部にカキ目が見られる。底部はヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。15は須恵器杯身で、色調は灰色、復元底径7.8cmである。底部は平坦で、回転ヘラ切り後軽いナデを施す。体部は斜上方に直線的にのび、内外面とも回転ナデである。16は須恵器椀で、色調は灰白色、復元高台径7.7cmである。体部はやや内湾しながら外方へのびている。底部はヘラ切り後、断面三角形の高台を貼り付け、高台内をナデしている。体部は内外面とも回転ナデである。17は土師器甕の破片である。淡赤褐色で、体部外面には平行条線状のタタキがあり、内面は磨滅が著しく調整は不明である。18は須恵器椀の破片で、復元口径17.6cmと大型である。内外面とも暗灰色であるが、外面口縁のみ黒灰色である。全体に回転ナデを施し、底部は欠損しているが、高台が付くと思われる。19は須恵器蓋で、色調は淡灰色、復元口径13.3cm、器高1.8cmである。中央部を欠損しているが、つまみは付かない器形と思われる。体部は斜め外方にのび、口縁端部は丸味をもち屈曲している。上部外面はヘラ切り後、ナデ調整を施し、その他は回転ナデである。



第13図 SX 1上部出土鉄滓

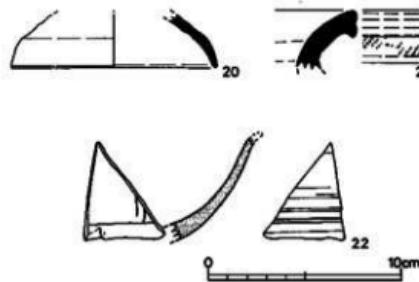
S X 1 上部からは、鐵滓が多量に出土した。第13図はその一部である。鐵滓は鐵冶津と考えられ、全般的に、鐵滓に含まれる鐵分の量が多い。鐵滓には焼けた粘土が付着したものがあり、製鐵炉の壁ではないかと推定される。

(6) その他の遺構と遺物

調査区南側中央でピットを2、東側中央で1検出した。径30~50cm、深さ10~20cm程度で、充満土はいずれも灰褐色粘質土である。いずれも調査区端で検出したため、柱穴と断定することはできない。土師器の破片が出土したピットもあるが、小片で時期を決定することはできない。

遺構に伴わない遺物（第14図、図版6）

古代から近・現代までの遺物が出土している。20は黒褐色粘質土上面で出土した須恵器杯蓋である。復元口径は10.5cmで、色調は淡灰色である。体部中位でわずかに屈曲し、口縁に到る。口縁はやや内湾しながらまっすぐ伸び端部を丸くおさめている。内外面とも回転ナデを施す。21は黒褐色粘質土上面から出土した甕の口縁部片である。内外面は乳白色、断面内側は暗灰褐色である。口縁部は外反し、端部を下方に拡張している。口縁部には格子状のタタキが見られるところから、亀山焼系と考えられる。22は青磁碗の破片である。外面にはヘラケズリ時に砂粒が動いて数条の横方向の線が見られるが基本的には無文である。内面には2条の縦方向の線が見られ、龍泉窯系で割花花弁文を片彫りしたものではないかと思われる。



第14図 遺構外出土遺物実測図 (1:3)

IV まとめ

宮本古墳の調査によって検出した遺構や遺物は以上の通りである。ここでは、遺構・遺物について若干の問題点を整理し、まとめにかえたい。

古墳について

宮本古墳は、長さ約7.2mの横穴式石室を内部主体とする古墳である。山間部の古墳としては大きい部類に入る石室である。総領町内の古墳は、舟迫古墳のように付近の水田からの比高約210mという山頂付近（標高約460m）に造られている例や、低丘陵上に立地している例もあるが、その多くは河川の近くの傾斜変換点に築造されている。このような古墳の立地は他の地域ではあまりみられず、総領町の急峻な地形に古墳の立地が規制された結果と考えられる。宮本古墳の被葬者は、この古墳の周辺一帯に勢力をもった有力者であったと推定されるが、周辺は谷あいの地で可耕地が少なく、農業生産だけでこれだけの石室を造るほどの勢力をもつ人物が現われたとは考え難く、その他に何らかの生活基盤があった可能性が高いと思われる。そこで考えられるのは、たら製鉄である。平城宮跡から出土した木簡により、奈良時代に三上郡（現在の庄原市南部）から租税として鉄が収められていたことが知られる。また、庄原市の戸の丸山遺跡⁽²⁾では、古墳時代後期と推定される製鉄炉が検出され、双三郡三良坂町の植松遺跡⁽³⁾では古代の木炭窯が検出されている。この他、庄原市内には、鉄製品の工房跡と推定される大成遺跡⁽⁴⁾や、鍛冶炉が2基検出された境ヶ谷遺跡⁽⁵⁾などの古墳時代の遺跡がある。このように備後北部では、古墳時代から盛んに鉄生産が行われていたようである。宮本古墳の石室内から鉄滓は出土していないが、周辺の地形からたら製鉄を行っていた集団と大いに関係があることは充分考えられる。

本古墳でも数回の追葬が行われたことが考えられるが、石室内はすでに重機で掘削されていたため、追葬の回数等は明らかにできなかった。

古墳の築造年代については、出土遺物から7世紀前半と考えられる。石室の構築方法などからもこの年代を肯定することができよう。

SK1について

この土壙から出土した土師器壙は、三次市の五反田第1号古墳⁽⁶⁾や庄原市の熊野遺跡⁽⁷⁾から出土した土師器壙と比較して、古い形態を示し、4世紀末頃に比定できる。この時代の遺構はSK1のみで、その性格を断定しがたいが、この土壙は住居跡に伴うとは考えられず、形は不整形ながら、墓壙の可能性が強いと思われる。

S X 1について

S X 1の時期、性格とも不明であるが、S X 1の上からはさまざまな時代の土器が出土した。弥生土器の甕は前期の特徴をもっており、この周辺には、弥生時代前期から人々が生活を営んでいたことが明らかになった。墳丘盛土から出土した土器とS X 1から出土した土器が接合する例が何例かあるため、S X 1には西隣の古墳から流入した遺物もあるようである。

また、平安時代の土器も多く出土しており、概ね10世紀に位置づけられる。土師器甕は、御調郡久井町⁽⁸⁾新池⁽⁹⁾跡や東広島市国分寺東方遺跡群・庄原市牛乗⁽¹⁰⁾遺跡で出土している甕と同一形態であろう。鉄滓もその頃と推定される。そうであれば、「日本後紀」の延暦24(805)年「又備後國神石・奴可・三上・惠蘇・甲努・世羅・三谿・三次等八郡調糸、相換鐵鉄」という記録や、「三代実録」の貞觀7(865)年「備後國神石・奴可・甲努・惠蘇・世良・三谿・三次・三上八郡僻居山間、土宜採鉄」という記録と関連して注目される。10世紀には、付近でたら製鉄が行われていた蓋然性が高い。

造構外出土遺物について

表土から、青磁碗が出土している。この青磁碗は龍泉窯系の割花文のものと思われ、13世紀後半に比定されている。この時代、青磁を所有することのできた人物は限られ、青磁碗の出土は注目される。

註

- (1) 「備後國三上郡調糸量拾口 天平十八年」など三上郡関係の木簡が3点出土している。
- (2) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター 「戸の丸山製鉄遺跡」 昭和62(1987)年
- (3) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター 「植松遺跡群」 昭和62(1987)年
- (4) 大成遺跡調査団 「庄原市大成遺跡の発掘調査」 昭和61(1986)年
- (5) 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター 「境ヶ谷遺跡群」 昭和58(1983)年
- (6) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター 「五反田第1・2号古墳発掘調査報告書」 昭和60(1985)年
- (7) 向田裕始 「庄原市上原町熊野遺跡出土の土師器」 「芸備」 第2集 芸備友の会 昭和49(1974)年
- (8) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター 「叩き目のある土師器」 「ひろしまの遺跡」 第19号 昭和60(1985)年
- (9) 広島県教育委員会 「安芸国分尼寺跡一伝承地にかかる第3次調査概報」 昭和55(1980)年
- (10) 広島県教育委員会 「牛乗遺跡」 「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」 (1) 昭和53(1978)年



a. 遠 景（南から）



b. 調査前近景（南から）



c. 墓丘断面（南から）



a. 天井石



b. 石室検出状況（南から）



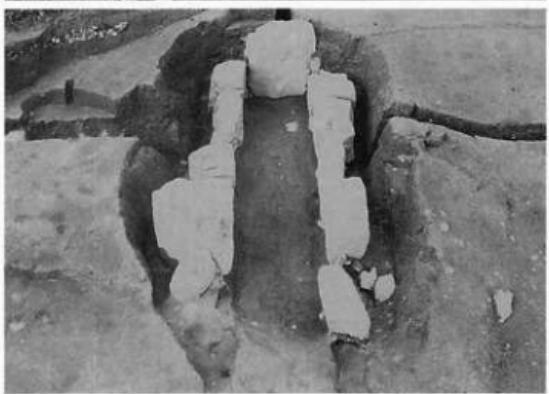
c. 奥壁（南から）



a. 東壁（西から）



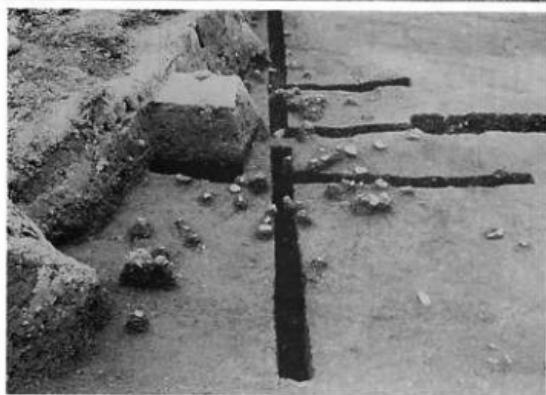
b. 西壁（東から）



c. 基底石及び振り方
(南から)



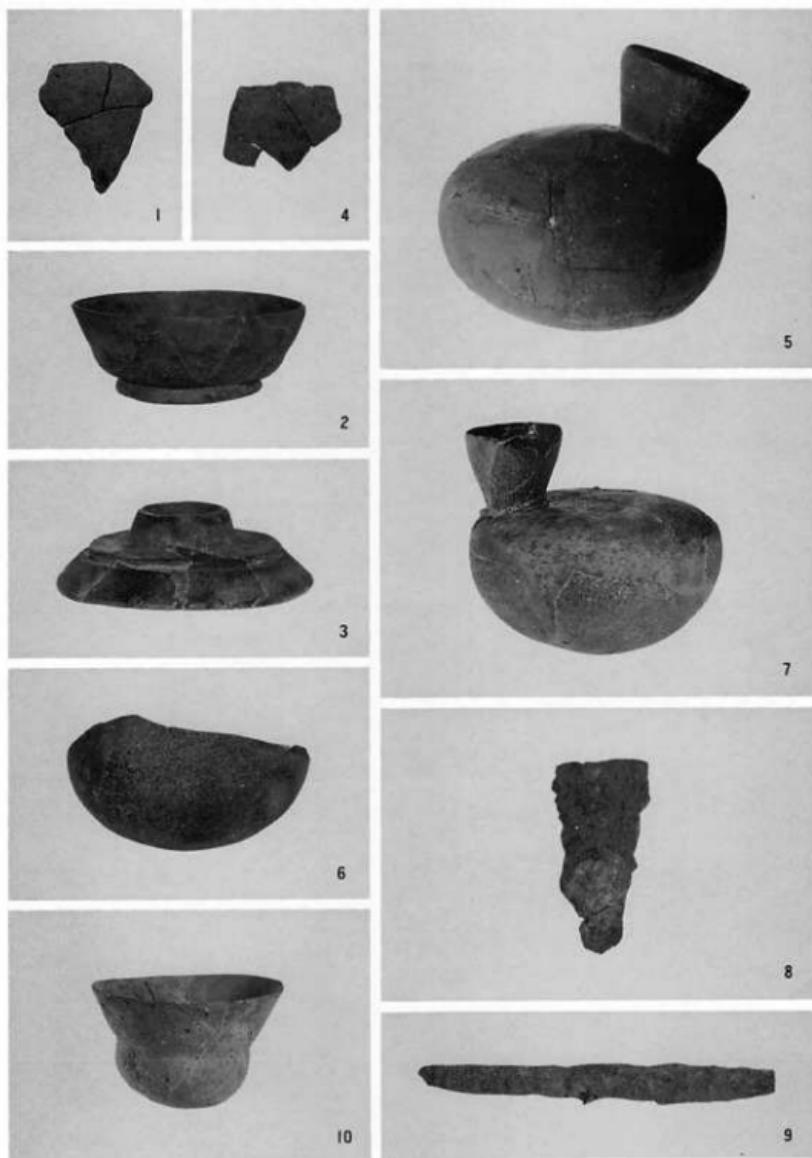
a. SK1 (東から)



b. SX1 遺物出土状況 (北から)

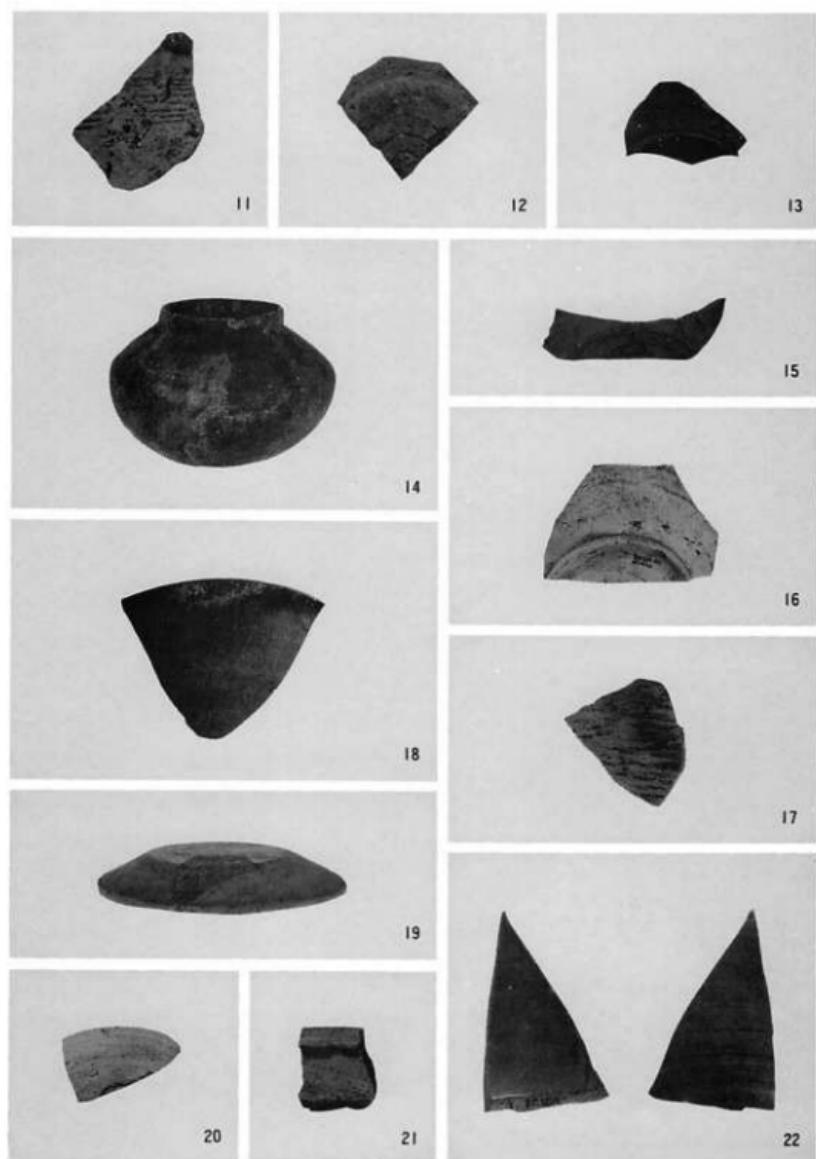


c. SX1 集石検出状況 (北から)



古墳・SK 1 出土遺物（1～9は古墳、10はSK 1）

図版 6



S X 1・造構外出土遺物 (11~19はS X 1, 20~22は造構外)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第71集

宮 本 古 墳

発 行 日：昭 和 63 (1988) 年 3 月

編集・発行

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

733 広島市西区観音新町 4 丁目 8-49

T E L (082) 295-5751

印 刷 株式会社中本本店印刷